

出だされる。

雨戸をゆるする木枯の音にも心は深く沈んで晩秋の夜の淋しさはいや増しにつのる。耳を澄ませば風の間ににひびくセコンドの音が、チクタクと單調な音を立ててゐる。風は相變らずハラ／＼と木の葉を誘つてゐる。(終)

佐 様 奈 良

春風駘蕩として觀花の客足亂るる陽春四月。燃ゆる希望に溢るる誇りを以て金色燦たる一中の徽章を戴いたのは己に五年の昔の事であつた。あゝ五ヶ年の長き月日よ！それは如何に遅き歩みを續けて來たか――。

願れば中學校と言ふ籠に飛びこんだのは自分一人ぢない同じ小學校から四人一緒に手を取つて這入つたのだ。然るに未だ一年もたたぬ中に一人は早くもあの世の人になつてしまつた。一人は二年目に親爺が死んだ爲、止めてしまつた。又一人は事もあらうに五年の一學期のみ終へて、一足に明治大學へ飛んだ、そして最後に殘されたのが自分一人――。何の事もなく、五年と言ふ長い月日を、みんなの尻へ喰ひ附いて此處までやつて來たのだ。けれども自分こそ我が小學校の同年卒業生中で、唯一の満足なる中學校卒業生である。自分の他には順調に中學校を出た者は一人も無いのだ。あゝ快なるかな！けれども自分が未だ中學の五年生で、小倉のツギのあた

つた服をきて窮々して居るのに、途中から大學あたりへ飛んで、折目正しいズボンなんか、はいて澄まして居る友を思ふ。一寸しやくにさはる。

だが自分の様な頭の悪い者が、それでもまあよく道を忘れずに五ヶ年の長年月を通つたものだ。辨當小脇に破れ靴引きづつて朝早うから晩くまで……小さな籠の中であつち向け、こつち向け――と教へられて來たのだ。そして此の間常に籠の破れ目を求めて黄色い嘴でつゝきまはり恐ろしい目でにらまれて來たのだ。だが見よ、今や籠の蓋は外されて自分達は始めて廣い／＼空に翔けり得るからだになつたのだ。あゝ快なる哉！四月の空は長閑だ、蝶も舞つてゐる、若草の芽も出て來る。そして櫻の蔭には美しく着飾つた女達がゾロ／＼と漫步して廻る。

實に好い春だ！好い氣味だ！けれども待てよ！あすこの梢には變な恰好した奴が止つて居るぞ。何だらう。おゝ、何さまあよく光る眼を持つ奴だらう！これぢやうつかり歩けないぞ、さうかと言つてじつとして居ちあ食物が無い。さあ困つた。誰も自分の餌を取つて來てくれる者は無し、弱つた／＼！わーい此の上は仕方が無い。己の事は己がせねばならぬのだ。生さんが爲めにはぢつとしちあ居れぬ。「男子志を立てえーッだ」「業若し成らずんば死すも歸らじだ」さうだ行かう理想の國へ！

は南へ。

私は冷い獨り思索の道をたぎつて、

清い美しい繪の中を歩む、苦しみ苦しんだ私共は青雲たなびく青い世界へ。清水は流れ眞砂子は光る、私共は只夢中に清くならうとした。清らかに氷のはる頃、秋は後へ。

冬は冷い獨り希望の道をたぎつて、

福壽草の咲き亂れた中を走る。種々體險した私共は光の入るこむ赤い世界へ。私共は永久に希望に生きようとしてゐる。一つ一つ道を踏んで來たんだから。

かうして、四季は何時の間にか消えてしまつた。

四 季

永 田 次 雄

應 援 歌

松 宮 重 次

春の日は暖い獨り快樂の道をたぎつて、
青麥や菜の花の中を行く。やつたさればそこには桃色の世界が。蝶は舞ひ鳥は歌ふ百々の千草が微笑んでゐる。私共は自己を忘れて夢の様に遊んだ、蝶が老いほれた時、桃色の春は去つた。

夏の日は暑い獨り苦しみの道をたぎつて、
赤く燃える焙鑪の中を進む。春の快樂のためぬ私共は毒蛇うづ巻く黒い世界へ。蛇は首をもたけ氣味悪い草はいきれ音す。私共は一心不亂に逃れ様さあせつた。北風が吹いて夏

嗚呼英傑が夢の跡 歴史は遠く三百年
金龜城頭我立ちて 尙武の風に嘯けば
諸君、此の歌を思ひ出し給へ、此の應援歌を。僕は此の歌を思ひ出すと、さうしても血が湧き上つて快活に成るのを禁じ得られませんか。

或る日――それは空の良く晴れた美しい日でした。僕は放課後歸宅してから、ただなんもなく學校に行つて見たさに、一人

で又暑い七月の太陽に照らされて學校に出かけました。學校はいつもミ勝手が違つて靜かにがらんとして、なんミなく物足らぬ様に思はれました。

正門を潜つて道場の前まで來た時に、バットで球を打つた様な響が校庭の方に當つて盛んに起つて居ります。あゝ野球が成程此の暑いのに猛練習をして居るのか——疲れる事だらう、ミ反射的に心に感じました。

かう感じるのが當り前です。彦中魂を持てる我々として此の熱心な野球部選手諸君に對し、いや我が運動部選手諸君の燃ゆるが如き活動に對して熱血迷らない者がはたして何人居るでせうか。然り彦中六百の赤鬼健兒の意氣は正に天を衝いて居るのです。そんな氣に成つて僕は生徒控所のがらミした中を歩いて行きました。靴の音の反響でゴトゴト大きく、控室全體が鳴りました。其の音に合せて自然に口なれた應援歌が歌はれました。

嗚呼英傑が夢の跡、歴史は遠く三百年、
金龜城頭我立ちて、尙武の風に嘯けば……。

全くたまらなく懐しいでした。其の歌が。たまらなく嬉しいでした。其の有様が。

しかし校庭に出て見るミ、ただ私一人で共に歌つて呉れる人が居りません。その不自然な淋しさ、七月の午後の校庭には微風が吹いて居て、バットの音のみが高く高く空に響くの

みでした。

湖に親しみて

「おーいもう出さぞ」ミ湖岸で聲がする。

「よつしやー今行くぞ」

早や木々は新緑に包まれて、遠く伊吹の靈山は雪の衣を脱ぎ棄てて、近くは野邊に雲雀のさへづりを聞き、のたりのたりの磯浪も今は全く春らしくなつた或日の午後。汗ばんだ肌を氣持良い風にさらし天下太平、ごろりミ石の河原に横になり石川五衛門から難波大助の話又新學年の頑張り、近き將來に行はれる入學試験の事等口角泡を飛ばして語り逢ひ、つかれた體をしばらく休ませて再び艇上の人ミなる。

鳩の湖面の小波を蹴たてて進む時の心地よさ、大空をも蓋はん鵬の翼ミなれる六本のオールもて、我が双腕のはちきれるまで力漕に次ぐ力漕の勇ましさ、男々しさ、しばらくして湖心に艇をミこめて、四方を見渡せば壯大ミ云はんか豪壯ミ云はんか懐しい彦根は遙か後方にわだかまり、古城の白壁が緑の木影からはつきりミ特に目立つて居る。すぐ目の前に多景島が横たはり、遠く賤が岳が水煙模糊の中に竹生島ミ相並び、

湖邊の春にかざられて 雲吹きはらふ伊吹山……

ミ調子はづれの歌を、怒鳴つて聲をからし、水邊に晝寢の夢

を結ぶ水鳥を驚かし、又渴しては底無し湖に上身を乗り出して水をくみ、或る時は雨に降られ風に會ひ波に揺られる。風も雨も將又波も物ミもせで突進む、或は百、二百、ロング又二本漕ミ城堀に夕焼の赤くうつり狭霧深く立ちこめる頃、艇庫の扉を閉じて家路にたぎる。

その夜は床に入るミ身動き一つせず熟睡し、翌朝はいつにない輝かしい太陽の光を見、握飯を持つて又湖上に浮び、赤い電燈の點々頃までも、近く大洞、五本松、磯山或は犬上川尻、遠く誓の御柱の下にオールの響勇ましくロングを引き、又渺々たる湖面に浮んで東伊吹の峯近く遙かに仰ぐ賤ヶ岳、西國三十三ヶ所の古き傳への竹生島、左手に近く沖の島、白鳥群る白石や遠く神秘の比良の山を望み、オール枕に横になり、「彦根良いミこ……」うなる有様を腦裡に畫いて見ただけでも愉快ではないか。

實にかゝるボートマンライフこそ、片舟の纜をこいて藍青の荒海にをざり出し生死の間に出没する我が同胞、又一旦緩急あらば夏の夕立の如く敵艦に肉迫し、忽然ミして姿をかくす我が帝國臣民にふさはしい勇壯にして美的なものではない。此處に於て初めて我が琵琶湖の有難味がわかるではないか。我々は何時にても湖に接し、親しみ、共に語る事が出来るそして大自然の偉大を味ひ、大自然の風致にいだかれ、大自然ミ融合する。

中江藤樹かの直弼公、又僧最澄及數多の偉人の産湯が流れば等の大小便が流れた、この曰く付きの大自然に親しみ、古人ミ語り古人を懷ふ事の出来る我々こそ眞に幸福である。

おゝ、今纜をこいた艇が湖岸を離れた。

「レディーゴー」の掛聲勇ましく見る見るうちに十間二十間

——沖の方に進んで行く。トツプの白波が美しい。

風が靜かに吹いて菜の花の黄いろい臭がして來る、雲雀が啼きながら空高く上つて行く。沖の方で聲する。

「よいの明星冷かに

朝霧深し金龜城

我は湖の子白浪の

騒ぐ磯邊に生ひ立ちて

逆巻く浪も龍巻も

いかで恐れん恐るべき」

こほろぎ

麻生龜吉

秋の夜長にすだく虫で、私は「こほろぎ」が一番好きだ。きりきり／＼ミ玉を軋らすやうな、轉ばすやうな、わぐる様な音は、松虫、鈴虫の音は知らないが、馬追ひや其の他名の知れぬ虫よりも上品であり、野越に富んでゐる。それはこれ程

多くが一時に鳴いても耳障りにはなる事なく、又唯一つが鳴いてゐるのもこよなくよい。田圃からの歸り道、行すぎた草むらから、きりく、聞えるのも、盆大の月が枯尾花を照す時、尾花の下ですだくのが、近よる足音に様子を伺ふ如く、はたき鳴きやんで、又きりく、鳴き出すのはさればきにあはれ深く、心を痛めるものであらう。まして夜晩く五燭の電燈の下で書に親しむ時、あたりで聞える一聲のさびしく、或ひはにぎやかに、或ひは心を減入らせるやうな音、冬も近くなつて最早なく虫もゐるまいと思ふ時に聞くその物淋しい音の「冬になつた、兄弟も死んだ、已一人だ」こいはんばかりの一聲は如何に人の心を引くことであらう。唯一つ惜しい事は、「こほろぎ」は蟻の勤勞に對照されて怠惰の役目を演ぜさせられてゐることである。

誤つて覺てゐるのかも知れぬが、或る人の説によれば勤勉家と思はれる蟻は、冬は蛙や蛇と同じく冬眠するさうである。若し事實とすればそれが冬の備へに食物を運びこいふのが嘘になる。併し、蟻は冬眠するにしても、日々營々活動く勤勉家だが、「こほろぎ」許り怠け者に引き出されるのはなんだが可哀さうだ。蟻かまきり「は見にくひ姿を枯野に曝すが此の虫の死屍を見た事がない。運悪く見のがしてゐたのかも知れぬが、まだそれ丈蟻や「かまきり」に勝つてゐる様にも思はれる。併しそれが死ななないで、冬眠するものとしても、そ

のよつて来る所を觀察して見るに、夏秋の候朝夕に草木の汁を吸うては、胡弓を引き、其の日其の目を面白く、をかしくすごして、寒季百々日の計をはからず、遂には半死半生のみにくき姿を示すに他ならぬ。當然の報いであらねばならぬ。私には「こほろぎ」の音色は何ともいへぬよい音に聞ゆるが、其の生涯を見渡して、我々反省の資すべきではあるまいか。社會の事相皆さうである様に思はれる。

春

霜

高祖保

きのふも今日もかなりの春霜であつた。起きで、見て、地上の白さが淡雪のふり止んだ後のそれと紛ふばかりだ。朝の氣が、中でもかうした春霜の朝は、しんめんと洗つてゆく齒に軋るやうなかんじがする。……
鶏がしろいものを吐き乍ら、松かさのやうな足跡をクツキリ示して棄て、ゆく。かれらは如何にもさむくない様に見えるが、その實空腹のため、われわれが寒さに氣が附かないのではあるまいか。その千鳥形に、點々こ落された足跡が庭いちめんを亂すこなる時は已に、春さきの太陽が、みんなそれらの霜をひきたりもなく引上げて了ふ。
「き、き、き、き……」いまごろ——春さきだに、季節

にそむいた百舌鳥が、近傍の沼のほとりの藪らしい處で、遠いやうなそれでゐて、また近いやうな、鋭い聲をはつする。
さむい朝。百舌の音や、はねつるべの軋りを聴きながら、しろじろ立て切つた障子に、瀟洒な日本風の座敷を明るませて、ばち／＼碁石のおこをひやかさせたならいかにも閑居の人らしい肌骨の概があるだらう。

わたしは霜さけに、いくぶん土の表面を緩めたと覺ほしい庭主に、ほそい掃痕を植ゑつけて行つた。手指のしんからいかにも冷氣のこぼるのをかんじる。——ほう／＼息をふきかける。こ——かんだかい隣家のはねつるべのおこ！それに次いで、ひさしきり遠いところの百舌が啼きわたる。例の沼の藪らしいやうだ。

こつこつ。鶏が褪めた色のこさを揺すりつゝ、小走りに、わたしの前をよこぎつたのだつた。
はる霜は、それから後しばらく、わたしが前栽を掃くあひだは置いてゐた。——（東京郊外目黒にて）

西郷小話

中川友三

現今でも薩隅では「大西郷」さか「南洲翁」等さは言はな

くて「西郷さん」が普及してゐるさういふ。事實大西郷さういふよりも西郷さんの方が餘計に親しみ易く、又その人らしく響いてくる。恰度いがくり頭に尻切草履の上野の銅像の如く、西郷の眞骨頂を傳へる上から言つて、甚だ當を得てゐると思ふ。又ある人は西郷の一面は善謀にありと言つた。これも道理のことで彼は人も知る天真流露の英雄である。彼の天真なる性格の言はしむるさう直ちにそれが輕い善謀となつて人の頸を解いたのである。陸軍大將になつても時には扈從連が冷汗を流す様な話題にも平然と觸れ高笑してゐたさういふ。こゝらは西郷獨特であつて他の英雄とは異色の濃い所である。垢抜けのしてゐる處である。

要するに西郷は裸であつたのだ。彼は浪人しても吉之助、遠島人になつても吉之助、近衛都督、正三位になつても吉之助、即ち彼は終始西郷吉之助で押し通したのだ。

西郷は偉大な愚物である。文化を超越した野人である。御前會議の際でさへよくズボン前釦を掛け忘れてゐた相だ。そして注意されるさ眞ッ赤になつて横へこそこそそれるのだ相である。こんな事の屢々繰返される處はさうしても「偉大なる愚物」の酷評は免れない。

彼には又や、こしい西洋料理の食ひ方も覺えられ相もない又文化住宅に彼を入れても似合ひ相もないし、勿論ダンスの

相手は出来ない。彼をして若し文化燦然たる現代に生かしめ結構なる教育を仕込んだ處であれだけ磨きをかけることは難しいだらう。

彼には化學の方程式の要はないし、又無理方程式を解く要もない。西郷は卓越した見識の外、何も要しない野人であるのだ。

3

彼はよく泣いた。あの豪快な大男が泣くといふことは一寸想像出来ないがほろ／＼大きな涙を流して小兒の様に泣いた。十年の役に伴菊次郎が負傷したといふ報告のあつた時なごは、本營に於いて他の見る目も氣の毒な位泣いたといふことだ。

一般から考へるさかういふ場合は、武人たる者は一滴の涙も見せず、却つて笑つて從容に語る様な態度を要求するのだ。武士道教育の眞髓も實にそこにあるのだ。ところが傑物西郷は左様しない。天真爛漫開放しである。悲しいといふ感情の動いた時、その悲しさを強ひてかくさうはしなかつた。私は當時の西郷はすでに舊道德に對して新しい解釋を自覺し信念を持つてゐたのであらうと思ふ。換言すれば彼は愛の人だ。情の人だ。感情が激發するさ何でもやつてのけた。

彼に若し情婦でもあつて、その女が心中を迫つたとする。そんな場合あの西郷はどんな處置を採らだらうか。これは西

郷の眞髓を探り當てる上から非常に興味ある問題である。私は言ふ。彼は一切を捨てゝその女と共に心中するだけの情熱と勇氣を持つてゐる。現に彼は久保市藏を刺し違へて死なうとしたこともあり、月照と相抱いて海に投じたこともある。

4

西郷さんが衆人から敬慕され崇拜され、私淑される所以のものは利害得失等といふ自己打算を超越した此の情熱である。彼を素晴らしき人間に仕上げたのも、又彼を破滅に導いたのもこの情熱である。この涙である。

利智や、聰明や、打算や、計略や、詭謀なんかは西郷は生れながらにして何處かに忘れて來てゐた。彼の脈絡にはあまりに赤い血潮が多過ぎたのだ。彼の涙腺にはあまりに涙が充滿し過ぎてゐた。

西郷は力の英雄、拳骨の英雄ではない。劍の英雄ではない。情の英雄だ。涙の英雄だ。家を焼かれ、骨肉を奪はれ、財産を捨て、までも、南國百二都城の健兒達は西郷の馬前で奮死してゐる。此くの如きは唯一つ彼等が平常西郷の熱血に、涙に、情熱に包まれてゐたからだ。

5

又かの征韓論の場合に於いても、西郷が若し大正式の小才に長けた政治家であつたら何も、さうムキになつて自分の持

論を振り立てすもよかつたのだ。反對黨をふうわりと包んで置いて時機を見計らつて乗出すことも決して不可能のことではなかつたのだ。

彼の熱情が迸り過ぎて、猪武者的に所信に向つて突進した傾がある。故大隈侯は、西郷を、衝氣に満ちる僞雄だと言言してゐるといふことを聞いたが、侯の様な機略奔放な政治家から見るとさう見えるのかも知れないが私は一箇の人間としての西郷は大隈さんより数枚上手であると思つてゐる。

6

纏めて結局西郷はさういふことが豪かつたかといふことになる。

彼は維新といふ大革命の雰圍氣の中に往來してゐても、別に武術に堪能なわけでもない。然らば兵法に秀でた處があるかと言へばこれも斷じて然らず。同藩では伊地知正治の如き、他藩では大村益次郎の如き兵略家の脚元にも寄りつけなかつたといふことが書物に見えてゐる。學問文章に於て傑出してゐたかといへば、これも格別の事は無き相だ。併るに事實に於ては維新の柱石として重きを成してゐるのみならず、西郷没後、尙今日に至るまで生ける人の如く敬慕され、景仰されてゐるその理由は何であるか。

西郷は實に政治家としての西郷でなく、軍人としての西郷でもなく、彼は一箇の人間としての彼であつたのだ。一箇の人間としての西郷が豪かつたのだ。

錦江灣の波、碧激激 櫻島の煙、白濛濛。風物依然舊態不改。西郷没して早くも五十年になる。だが必ずしもお祭騒ぎをして、事新しく追憶する必要もない。山岡鐵舟翁がすでに「この人永久に死する人に非ず」と言つてゐる。

— 大西郷像約全集締切迫る一日 —

汽車にて

漢 見 覺 了

暑い。午後の太陽は西向の窓から容赦なく照り込んで來る炎熱を衝いて走る列車内は、時々思ひ出した様に生温い風が埃と共に飛び込んで來るばかり、人の熱蒸る煙草の煙で蒸せ返つてゐる。乗車した時から前の席に腰掛けてゐる田舎唄い爺さん——最ふ五十四五らしい——年寄に不似な黒縁の眼鏡の奥から、だる相に窓外の景色を見てゐるが、思ひ出した様に胸巻の中から古びた煙草入を出して吸ひ初めた。

顔の小皺を傳ふて昇つて行く煙は、この炎熱も騒々しい列車の響も無關心に、扇の餘風に煽られてフワリ／＼網棚の隅に消えて仕舞ふ。向ふの席には三十前後らしい女が爺さんの横手に頭を突出して寝てゐる。半分崩れた髻からは、水晶まがひの硝子玉の一つ取れた櫛が、僅かの亂毛に危ふく支へられ

てる、毛の間から流れ出た汗が頸筋の白粉に灰色に濁つて垢じみた襟に吸ひ込まれて行くのも何だか暑い。

先程から頻に喋つてゐるのは登山歸りの兄妹らしい。兄の方の霜降の上衣にキッドの編上靴が如何にも學生の無鐵砲さを表してゐる。話し疲れたのか息杖に合して口笛を吹きだした。デロリ爺さんの目が五月蠅氣に動いた、同時にボンミ一層大きく煙管の音がした。——如何にも皮肉に——。

秋近い夕雨後の感じ

大橋 啓

夕立だ!!二時間前に叫んだ、が實際ほんの夕立であつた東山が次第に姿を消して行つたので雨と言ふ事が解つたのだ宅からは東山一帯は自由に見える。然し雨後の涼しさは流石に秋が近い事を物語る。そこらの溝の何處かに蚯蚓の聲がする。やはり雨を喜ぶ者の一ツ。それで喜んでゐるのである。何處か初夏の蟬の聲に似て居る。

「蚊が居ないねエ——此の分では蚊張はいらない」母の獨話。實際秋近くの蚊は一雨後に減つて行く。

階下の通りを人が通る。濡れた地面がそこやら其の人の足を引き止めるやうだ。そんな音がする。

風が窓を通つて入つた。机の上の紙片を少し上げただけで

知らぬ間に足は私を彼等と共に道頓堀へ運んでゐた。華かなここから云へば道頓堀河畔は當に大阪一である。五座の櫓の梵天に嘯く夏の夜風は、芝居茶屋の暖簾を潜つて川向へ消れて行く。

涼み舟が行き交ふ、ボートが波を蹴る、水が飛ぶ、提灯が揺れる、人々の白い着物がちら／＼する、道頓堀の夜は、凡ての華かな色で描かれた一枚の油繪だ!強い歡樂の酒に酔つた泥酔者の表情だ!

此處にも私の好きな大阪情緒は流れてゐるが然し、それは舶來化された情緒だ、安っぽい大阪情緒だ。私は何時の間にか、歡樂を追ふデカダンの群に押されながら歸路を辿つてゐるのだつた。

夏祭

夏の大阪から、この詩趣の乏しい大阪から、漸く之を維持してゐる漫歩の夏祭を奪つてしまふことは無理な様な気がする。ここは左様に、私はこの大阪の夏の夜の漫歩を、夏祭に強い憧憬と親しみを持つてゐる。

而も夏祭は、大阪の夏に離れられない迄に、昔から毎年續けられてゐるのだ。この夏祭を題材とした劇に、團七九郎兵衛の、「夏祭浪花鑑」のあるのは廣く人の知る所である。夏祭、これこそは大阪の夏を彩る重大な色彩の一つである。

文苑

過ぎた。秋近くの夕雨後の快さ。

想夏 一一題

織田 誠 一

漫歩

大阪は騒しい、狭苦しい、暑い。けれども私は、この暑い大阪の夏の夜から涼しい河邊の漫歩を忘れる事は出来ない。夕闇が街一杯に擴がり切つてしまふ迄、今迄の黄塵萬丈の大阪も矢張り昨夜の様に、詩趣のある夜の大阪になつてしまふ。浴後の肌にならつた帷子を引掛ける迄、ぶら／＼歩いて行つて橋の上に立つ——此岸の柳を颯／＼撫でた、ひやりとした風が、軽く私の袖や裾をはたいて消えて行く……。欄干から川面を見る、月も出てゐない夜には波の動靜も見えないが、それに映る燈火が揺れるのを見るに矢張り波も動いてゐるのが分る。

空を見上げる。雨の降りさうにも無い夜、雲一つ出てゐない夜には、燦然と青白い星が瞬き交してゐる。ちつと見えてゐるに際限がない……踵を返すに其處を放れて灯の輝いてゐる方へ近づいて行く。ゾロ……ゾロ……ゾロ。絶間なく涼み客が通り過ぎる。誰も彼も同じ様な表情をしてゐる。

夏祭の中でも天満天神のそれは殊に見物である。

私はその日——七月二十五日——江の子島のE橋からそれを眺めた。空は曇り勝ちな雨雲に満たされて、所々で焚く篝火がうすく雲に映つてゐた。……可成り廣い川も多くの見物船や、御迎船や、モーターボート埋められて、川岸の篝火の影を浮かばせながらゆる／＼であらう——流れてゐる。兩岸には眞黒になつた見物人が重つてゐる。……私は廣重の天神祭の圖を思ひ出した。今と較ぶれば遙かの相違である。

彼の描いた木の橋は、石造の頑強な橋に、兩岸の瓦屋根は西洋館に、チョン髭は散髪に……數へて行けば限りは無い。然しその繪の中を流れるかすかな所謂夏祭の雰圍氣は今も大した變りはない。私はかうした大阪情緒、純粹の上方情緒の遺憾なく發揮されてゐる夏祭の毎年催される事を喜ぶ。

御渡りの時分になるに、騒しく太鼓や鉦が鳴り出すに、ごんご船が、ザツザツと櫓で波を破りながら、威勢よく川を上下する。種々の人形を安座した御迎船が動き出してゐる。文樂の人形の様な白い、尖つた顔が、舳の電燈を受けて浮き出してゐる。

壯嚴な鉦の音が川面を傳つて来る。もつとも、私ばかりが莊嚴と思ふのかも知れない。而もその音はたまらなく哀愁的だ。莊嚴な鉦の音に、物凄く赤い篝火の焰、惡魔派の繪に見出すシーンだ。

家へ歸へつてから彦根への手紙を書いてゐた。静かな夜氣をふるはして矢張り太鼓の音がかすかに聞える。そこでかすかに鉦の音が附隨して聞える。ぞつとした様な淋しさに襲はれて見上げた空には依然と密雲が靜止してゐる。そして矢張り薄赤い色がぼんやり映つてゐた。

鼠

臺所の棚の上に今殺したての二匹の鶏が無造作に置かれてある。明るい午後の光線はこの二匹の鶏を射通して居る。臺所にはコックも下女も居ない。鼠が五六匹大きな醬油樽の蔭から出て來た。綺麗に掃除の行届いた臺所には米粒一つ落ちて居ない。鼠達はおのづから不安を感じない譯には居られなかつたであらう。

小さなずい十幾つかの眼は、言ひ合したやうに棚の死鳥の上にそゝがれた。中の一匹はスル／＼棚の上に駆け上つた。白眼をした鳥の頭に鋭い尖つた牙をあてた。次の一匹も又次の一匹も憐れにも鶏の頭は遂に切り取られた。赤い血が醬油樽の上に落ちかゝつた。丁度その時臺所の戸が異様な物音を立てながら開いた。二三匹の鼠は急いで醬油樽の蔭に隠れた。女中がホースの水を次ぎに來た。棚の上では氣早の一匹の鼠が分捕つた頭を自分の巢に持つて行く工夫をして居た。

「すべつたらな——ハハハハ」

「何んやてすべるもんか」K——さんは、大きな高笑ひを残して、長いサーベルをガチャ／＼言はせ乍ら共同便所の影に折れて行つた。

角の藥屋の内儀が寢巻の儘で、戸を開けてゐたが、私の顔を見て、笑ひ乍ら「わらい早うおまんな」言つた。もう一度橋の上に来るに先程の船の上に小さな小供が二人走り廻つてゐた。水の上を大きな石炭箱が軽く流れて行つた。

日は大分上に昇つた。戸を開ける家がだん／＼殖つて來た私は襟を合せて家へ急いだ。

出雲から

岡庭博

午後五時三十分今市に着く。おびただしい見送人はブラツトホームに滿ちた。汽車は着いた。僕等は乗つた。人々は各自に色々な事を言つて居る然し。其等は僕の耳にははつきり聞えなかつた。父だけが降りて話をして居た。やがて發車を告げるベルはけたたましく鳴つた。

「さうなら／＼」最後の言葉は其處此所で交された。遂に汽車は動き出した。數名の友人の顔がだん／＼小さくぼろ／＼して行く。彼等は手を舉げた。僕も其に應じてハンカチを

春の朝

爽かな朝である。

濁つては居るが、鏡のやうな光澤をもつて居る川面には、ほんのり霞が漂うて居る。もやいだ船が一艘、眠りの姿を横たへて居る。船頭さんは、ねむさうに船の底から上つて來て造作なく川の水で顔を洗つた。そして顔をふきながら二言三言低い調子で何かいふ、船の底から女らしい聲が聞えた。やがて小さい子供を負つた船頭さんの女房が上つて來てブツ／＼云ひ乍ら、バケツへ水を入れて火種を作り始める。私は水から水へ移り歩く此人達は香氣だが頼りない生活が、羨しくも心細くも思はれた。橋の上を淡く照らしてゐた電燈が音もなく消えた。それと同時に東の空が赤くなつた。

交番所の開き難い硝子戸が大きな音をたてて開かれた。顔なじみのK——巡査が、手袋を持つて出て來られて、私を見

る。

「今日は馬鹿に早いなあ、雨が降るぞ」云はれた。

「Kはん、いつもこない早うおまんのか」私は丈の高いKさんを見上げる様にして云つた。

「うん、これから巡回や」

「Kはん、いつか言つてはつた試験受けはりましたか」

「まだや、パスしたら部長やで」

振つた。ハンカチは無心にひらめく。遂に彼等は見えなくなつた。やがて黒煙は斐伊川に横はつた。斐伊川は洋々し流れに居る。ああ斐伊川、半年前に見た時は變らないがただ僕等のみ早くも此の地を去つて行かねばならない。

汽車は斐伊川を過ぎて廣々とした篠川平野を走る。篠川平野の夏の緑は去つて、今は青々とした碧雲湖を望む事が出來た。穴道湖は波は少し高かつたが彼方に起伏する島根山脈、東の方は松江から西は篠川平野に到るまでよく見る事が出來た。

松江を出たのは六時半大橋川天神川に沿つて東行する。是等の川は川よりもむしろ運河とも言ふべく、穴道湖と中海をつなぐ大切な川で小蒸氣船は絶えず往來して居る。安來を出て夕陽が中海に漂よひ彼の尼子氏の古城月山を右に見た時彼方に現はれたのは大山であつた。大山又は出雲富士海拔千七百米約六千尺山陰一の高山である。汽車は雲伯二洲の境を過ぎ米子に着き、日野川を渡つた。時に落陽は大山にかけ實に壯嚴なる美觀を呈した。

八時前赤崎を出た何時しか眠つてしまつた。

再び眼をさました時、汽車は眞暗な原野を走つて居た。「今ここに居るのだらう」と思ふ間もなく汽車は鳥取についた。乗る者は三人あつたが誰も降りなかつた。眠たい／＼再び眠つてしまつた。ふと眼をさました時は汽車はトンネルの中

を走つて居る。もう兵庫縣だらうかと思へて居る。汽車はばつと明るい所へ出た停車場を通過する。しばらくして汽車は濱坂に着いた。濱坂を過ぎて半時間程して誰かが余部だ。叫ぶ窓から顔を出して見る。家の火はつと下に見え、森も林も皆下を行く。汽車は余部の立橋を過ぎたのである。又何時の間にか眠つた。目をさました時「わだやま」驛夫の聲も眠さうに聞ゆる。

福知山、綾部も過ぎ丹波高地も何時か過ぎ未明保津川を見る。岩はあちらこちらに立ち川は細く深い。岩間を通る清流は或は淵なり或は瀬なる。實に保津川は天下の絶景である。汽車は保津川に黒煙をなびかせて渡る。午前六時京都に着いた。数時間旅館で汽車を待つ。

十一時京都を發車し、東山、逢坂の兩トンネルをくぐり大津で半年振りに琵琶湖を見た。やがて汽車は瀬田川を渡り三上山を右に見て草津を過ぎる。野洲、日野の二川は水枯れてゐる。八幡安土も過ぎ、彦根もいよく近づいた。車窓から見れば金龜城も以前と變らず芹川の清流も前と同じであつた。一時過彦根に下車した。何とも言へぬ懐しさを感じた。

晩秋初冬の景

木村 三雄

弟に雨がこない様にしてやりたいんだが傘はない。僕の帽子をかぶせて僕の前掛を其の上にかけてやつたが雨は益々強くなつて来る。傘を買つてやりたいけれども店はない。お腹がすいた。弟が言ふから何か買つて食べさせたいが金が無い道で二人は立ち止つて困つて居る。目が覺めた。

考へて見る。四年前の事が夢に見えたのだが、あの時の事を思ひ出す。目には熱い涙が湧いてくる。弟が生きて居たら又弟が生きて居る中に、もつと、もつとかがはいがつたらそんなに喜んだであらう……心の底から熱い涙が出て来る。

晩秋

林 弘英

美しかつた紅葉があはたしく散りうせて、野も山も一時に淋しくなつた。葉の落ちつくした梢から梢へ飛び廻つてゐる鳥の啼き聲も何となく淋しく聞ゆる。起きて見る。毎朝きまつた様に雀がないてゐる。けれども其の聲は春や夏はちがつて泣きたい程悲しく聞ゆる。田にはもう一株の稲も見られない。只うね／＼長く其の切株ばかりが續いてゐる。畦に立つてゐる案山子が破れた笠をつけながら淋しさうにふるへてゐる。庭先に咲いた菊だけが、かつした淋しい中にも晩秋の庭を色づつてゐる。

つい昨日まで黄金の雲を誇りし紅葉も地に落ち初冬の風に吹きまくらるはいさ寂しげなる心地す。朝來の風、雨。變はりて大氣いやが上にも冷え落葉の風に吹かれ雨にた、かれ泥土に塗れたるもいさあはれなり。

風きつう吹きて電線は空中にほえ、犬の子一つだに通らぬ小川の小道にて端女の洗濯するあり。亂毛、顔を掩ひて寒く見ゆる中に一層のすみあり。

父上の丹精したまひし、白菊に暗褐色まばらに交はり一瓣一瓣はころび初めて秋の去りしを深く物語る。雨やみて雲間より照りし日に雀共喜びて熟柿をつくあり、南天燭の實をついばむあり。木より木に、枝より枝に飛びかわしをるも趣あり。

夜に入りて又空あやしうなり、時雨始めぬ。

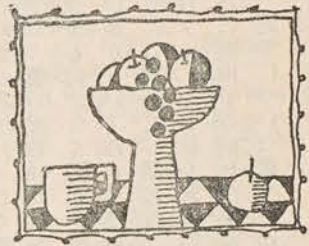
町角の外燈の風にゆられて、こもりつ消えつするあり。雪は降らねど伊吹風は強くして、家なご倒さんばかりの勢にて野山を吹き行く。(十一月三十日記)

昨夜の夢

重森 久雄

僕と弟と二人でまだ知らない或る町にまよひ込み困つて居る。細く／＼霧のやうな雨が降つて来た。





詩

藻

◆詩林◆

旭日

仁志佐和

水氣の多い朝の空気に
火にほてつた顔をさらす心持
やがて寒さに泣く身なれど……

遠く麓を包んだ薄もやから
元氣よい東天紅の聲——

いまだ眠りから覺めない朝の道は

間斷なきかのひびき

ティツク！ティツク！

絶間なき時の流れ

移り行く瞬時

現實の輝き

默想の境地

全宇宙のすべてを

永久に……不歸の時刻を

未來の影像に展開する

あの森嚴な音響をたゞへながら

……

をやみなきリズムの悠久へ

自然の姿

若芽をつくる

小枝をつくる

幹をつくる

根をつくる

葉をつくる

さうして露の滴る果をつくる

春は芽に延び花に咲き

夏は枝にのび葉にしけり

詩

藻

ほんやり光る街燈に照らされて
冷く光つて居る
やがて雨戸を開く音のするころ
我が汽車も漸く進んで行く
朝日は硝子窓を透してしみこむ。
そして人は新しい朝の光を浴び様こ
窓側に寄り添つて集る。

時の流れ

疋田芳夫

我は默然として時計の面を窺ふ

秋は美しい果を結ぶ
上に延びぬ冬の日は
下へへ根をおろす
上に延びよ！
下に延びよ！
外につくれ！
内につくれ！
延びるこゝ、つくる事
それが自然の姿である

朝

小林英太郎

すばらしい朝！
日はうら／＼と若葉の梢に
朝の光をみなぎらしてゐる
雀が煤けた屋根裏に
持前の歌を歌つてゐる。
(典雅な灰色の翼より
もれ来る鏽ある其の囀り)

「チユン・チユン……」
静かな朝の大氣に

詩

藻

異常な波動を起して
わたしの胸奥にまけこんで来る。

光の白い箭の様な線は
明らかな玻璃窓を通して
洪水の様に氾濫する
わたしの存在をこりまく
この空間はすべて／＼が
やわらかい！爽かな匂ひに充ちてゐる。

朝！あたゝかい日ざしのもとに
洗はれて、きよめられた私の魂が
宇宙の「エーサー」ミ
まざり合ふのを見るのは幸福だ。

秋

井上 登

秋はこの世へ訪れた
草も枯れ木も葉を落して
スツキリした空には
雲の片だにない

四〇

高い樹枝の木がぐれに
鳥が寂しげに鳴いてゐる
かれた川には二三羽のあひるが
頻りに餌をあさつてゐる

私は悲しまず楽しみもせず
ちつと芝の上に腰を下して
夕陽を眺めながら
遠い想ひに耽る。

岐路

須山清太郎

旅人は停む別れ路に
深き思ひに沈み
前途の光明を夢みつゝ
あれか、これが
いつれの途を辿らんミ
昨日も今日も
迷ひの日は暮れる
我れ人生の別れ路に
旅人の思ひを抱きつゝ停る。
玉のささやき

親に貰ひし無垢の玉
傷つきければ

親にかくして秘めおけば
傷をましぬ。

或る夜玉はささやく

「良き玉の中に交へよ

悪しき玉には

かざあれば傷つく」ミ。

一つ星

松宮重次

野山が赤い

夕焼で

遊びつかれた

子供等が

楽しい

お家に歸る時

赤い雲の間から

大きな青い

一つ星

一つ星見つけた

一つ星

詩

藻

夕焼・小焼

あしたも

お天気

嬉しいなあ。

夕 空

専賣局の

笛がなる

寒く曇つた

夕空に

ボーミ

ふるへた

音が響く

からす、からす

三羽二羽

み山の森に

消えて行く

暗い夕靄

たなびいて

赤い

電氣が

ふこついた。

四一

詩

藻

夢

寒い冬の
眞夜中に
遠くの山の
てつべんで
丸いお月さんが
手で招く
おいで、おいでこ
手で招く

海 四篇

澤田勇二良

夕焼の海

黄金色の夕日が半ば没して
海は理想の詩を高吟する。

青き海

海は水晶のやうに青くすぎこほり
地平線のあなたに不滅の光を見る
永遠の波をわたつて
永遠の光線は永遠に輝く。

荒 海

四二

嘗て私は氷のやうに恐ろしい海を見た
狼の牙のやうに尖つた悪魔達が
物凄い白刃をひらめかしあつてゐた
さうして彼等の勝利者は叫んだ
タラッタ!! タラッタ!!

暴風雨の海

千切れるやうな眞黒な太陽が没し去るミ
怖ろしい角の生えた雲がかなぎのやうに湧上つて来て
海は黒死病のやうに眞暗で
大蛇のやうにのたうちまはり
骸骨のやうにおざりだして
その底には
冷たい死がうづくまつてゐるやうだ。

部屋籠り

大橋 啓

鐘の音散りて聞こゆ
秋風少し吹く
夜の
心沈む部屋。

小窓よりの眺めも
只空の星なれば
風寂しく訪づる
樹近き部屋。

讀書する子の吐られて寝たり
安らかの寢息此處まで聞こゆ
風來たる餘燐の部屋。

ごもし火の親しみ
黄か——赤か……
晝間追ひし小犬の後姿想ふ

今日一日も風に終るらし
部屋の淋しさよ。

夏の大きさ

あの雲だ!
あの青空だ!
入道雲に
夕焼の空だ!
夏の大きな尊い力は四方に擴つてゐる。

詩

藻

朝

坂本至誠

向ふの土蔵の白壁が
薄紅に光つてて
枯木の影がゆれてゐる
その枯れた木へどこからか
雀が一羽飛んで來た
此の枯れた木に雀は
大きく一べんゆれた後
かすかにひこりでゆれてゐる。

小 川

四三

永遠の彼方に流れる小さな小川
憂鬱な雑草に蔽はれがちな
でも断えない生の踊躍を續けて
あゝお前は何云ふ至純な美しき者
歩み疲れた私の憐れな幻像を消しておくれ
小さく——小さくさいなで
その踊躍の彼方へ——地平線の彼方へ
遠く遠く流し去つておくれ
潑刺たる踊躍を續くる小川

人生 悲歌

俺と言ふ小さい人間が
生と言ふ狭隘な容器の中に狂ひまはつてゐるのだ
不透明な宇宙。無知の人間の悲哀。

人間の世に人間が生れる
何の不思議があらうぞ
絶ゆるなきこの悩み
人間なる故に、人間の世なるが故に。

マツチ

一寸すればすぐ燃えて

又すぐ消えて
あゝは暗の寂しさばかり

マツチの様な我が心
一寸燃えてはすぐ消えて
あゝは暗の寂しさばかり

小さな憧憬

林 俊雄

愛らしきわらべの
唇から靜かに洩れる
夢の歌

幽玄の中に浮ぶ
ボエテカルの國よ。

▼
ヴェスピアス山の朝

ナイル河の夕

平和なローマの其の冥寂
憧れな……

ナボリの其の月影

小波岸打つ

ベニス宵の

昨夜青白い月を宿したカーテンが
ひらりこゆれて秋の日が入る
アーツ、まばゆい……

コスモスの花名知らぬ花が
きり／＼そこに舞ふ

師や友がその間をふみわけて行く
僕は何でか進めない進めない
悲しくなつて泣き出せば

カーテン閉ぢて日が入らぬ

矢張り眞白のベッドの上だ
散りかけた江戸菊の花が唯一……
憧れの師憧れの友
胸きづつきし私の瞬間の夢

銀座の印象

宮川卯衛門

赤い燈が銀座の街を照してゐる

通り行く車のヘッド・ライト、
無雑作に照してゐる街路燈

流るる口笛

セロの響

埃及の

廢墟を照らす

青白い星一つ……

そは

詩人ダントや

ロングフエローの

消えざる夢か

生命の糧か

▼

歌へ歌へ……

涙ぐましい今が戀しい

憧れた昔が戀しい

おゝ！

歌へ歌へよ

愛らしく

夢の歌曲を

瞬間の夢

林間から林間を辿る秋の詩人が
病院の窓へ訪れて來た

カツフェーから洩れて来る五色の光
それらがみんな
力強い「芽生え」を表示して
私を迎へてくれた。
路行く人の足並までが
「新生」の歡びを印して往くやうだ。
私もその一人なのか？

レストランの窓から
「新生に蘇つた感激」の
ゆかしいメロデーが
靜かに流れてくる。

二人のモダン・ガールが資生堂に入つて行つた。

銀座の街——
それは遺憾なく沸點に達した
現代文化を表徴してゐる。
薄い文化だ！
然しその淺薄な霧圍氣の中に
復興の岡へミ歩みつゝある
都會人の心が充分視はれる。

ゆふがた、停電がきた
ひこり身の虚し心に蠟燭を點ずる
停電の如法暗闇の寥闊に、己は獨坐する
からからミ

——きこゆは
たそがれの庭をはしる、落葉の音。

景觀閃刀紙
これはまた、なんこいふ靜けさであるか
——夜風もなく、音もなく

炬燵を抱いて、うるめる十六燭燈下、四坪の庭を
くりひろげる
——外は、寥落水のやうな月であるか
——地は、かるい沍寒をもつた落葉であるか……

失意

僧房にくる日もくる日も
儚く日暮らしする人たちよ、佛鬱なる群集よ
庫裡に住まふ古びた穴狸のやうな……

現世に捨てられた一個の失樂園を思ひあはせて

銀座は矢張り
「新生」の天地だ。
七、二九

讚美の秋

清澄の秋空——

數ある不淨をすつくり拭つて
透徹せるその大空——

秋の凡ては高い御空に
碧く澄みたる秋空の最中に
「眞」ミ「美」の鍵を以て秘められてゐる。

「秋」に對する

若人の凡ての慾求は

「空の寶庫」に依つて充たされるのだ。

「秋の空」は偉大だ。

感謝ミ讚美を私は秋空に捧げる。

冬夜集

高祖 保

落葉

自分は實際
さみしいと思つた。

野末

風になびいて波うつ薄
洋々ミ天涯を流動する秋から冬へかけての纖雪……

おのがさびしい心情は
あはれ
野の遠かたに立つ一煙のなびきにもつれる。

落葉を呼ぶ

おちばを呼ぶ
からからからミ、落葉を呼ぶ
昨日の夢
薫味の瑠璃盤にかゝる落葉を呼ぶ……

筆の讚

吉川文一郎

月花めづる風流男が
向ふ机の紙のうへ
走ればやがて歌なりて

詩

藻

星照り日出で鳥唄ふ。

天地満く繪たくみが

よるや南の窓のこ

動けばやがて繪は成りて

水落ち木生ひ草青し。

壯志鬱勃天を衝く

英雄の手に觸るゝ時

落筆のこ龍蛇飛び

雲煙くらく地を蔽ふ。

慷慨淋漓怒髪立つ

志士のかひなに執られては

片言隻句鬼神泣き

哀音ながく世に傳ふ。

功成り名遂げ業卒へて

身は棄てらるゝくさの中

煙こ化して消ゆれども

恨まぬ筆の心清しや。

山中興趣

瀧のひびき松の風

心、こはに清く

花の色、鳥の聲

面を打つは矢の如き吹雪!!

頬を流るゝは熱いゝ涙

更に見よ

皆黙して立てる樹々を

枝は泣き枝は折れたり

骨に沁む虐けの鞭

彼等は隠忍を讃へるのだ

僕は今高らかに歌ふ。



短歌

歌留多果てゝ

仁志佐和

いこまして静けき街をわが行けば街燈の光淋しくもある。
友の家別れ出でにし冬の夜を足音高くわれは歸れり。
足跡もなき新雪に悩みつづつ驛にむかひて我は行くなり。
ふるへつつ薄きマントに包まれて汽車待つ時の待ち遠きか
も。

寒空に何處に行くか下駄の音夕べのやみに高くひびきぬ。

詩

藻

月日、そゞろに長し。

四八

雲を分けて、苔に臥し
露に酔ひて、歌ふ
峰の春、谷の秋

誰か知る、この心。

苦闘讃歌

噫!! 荒漠たる冬の大地

雪に埋もれし高原に立ちて

僕は歌ふ

高らかに僕は歌ふ

咽喉は破れ血は流れ

點々として雪を眞紅に彩る

見よ!! 見よ 荒漠たる冬の大地

地の中に春を待つ何百萬の草の芽

彼等は苦闘を讃へるのだ

僕は今高らかに歌ふ

噫!! 荒漠たる冬の大地

肌をつん裂く寒風に打ち向ひ

垢に汚れたる長髪を逆立て

僕は今高らかに歌ふ

煙のみ見えて來らず我が汽車は山の彼方を走るならしも。
のほりきて遠き野末を見返れば電柱の列白くつづきぬ。
點々こ青き若葉の茂みより手拭白し桑つむ乙女。
汗ちみて着物の裾のもつるるを忍びて歩く道のはるけさ。
夏の夜はまだ宵ならし門の邊に物語りする人の去らねば。
今日何處明日はもいづこさすらひのたひにやつれし巡禮あ
はれ。
月今宵呀わたる空を聲ばかりこいさぎ行きぬ八月のくれ。
ほうくくこふくろふの鳴く宵靜か告ぐる十時のサイレン聞
ゆ。
さよならこ別れしてより何こなくまだ言ひ足らず振り返り
見ぬ。(フートのすみより)

秋の歌

大森元太郎

月のさす野路をしゆけば聞ゆなり秋をしらぶる鈴虫の聲。
初秋の黄色き光をさまりて小豆畑にこほろぎのなく。
秋の日は靜に暮れて月のてる文讀む窓にこほろぎの鳴く。

湖南にて

井上 登

ふる郷の湖に舟浮かべそよ風に知るも懐かし藻の香ひかな

四九

讀みあきて窓を開けば裏の蔵斜に午後の陽が射してをり。
臺所にて茶碗破りたる音聞ゆ置石の上にトカケ這ふ眞晝。
あまりにも叱りし弟の寝顔見てそのいささに涙ながしぬ。
月の夜の散歩にいつも來し丘は木の葉散りしき秋ふかみた
り。
夜にいらて曇りし空は雨となりぬふる郷の母をおもひ出で
つも。
床ぬちにてかすかに聞ゆ汽車の音に汽車通學の頃を思ひ起
しぬ。

石山寺

いく年か経て石山を訪ねれば遠き思ひに涙ながれぬ。
寂しさや上り下りのきざはしの足のあひまに蟋蟀のなく。
人絶てて秋風めぐる山門にたゞすむ雛僧見れば淋しも。
今宵また太き柱に身をよせて一人淋しくこぼろぎをきく。
都人多かりしか疑はるすゝきの搖ぐ石山の秋。

友

すこやかに堺あたりに住めりこかやるにやられず消息書き
得れど。
來年こそいぢらしく言ひし友の肩のほごりにあかしやが
散る。

子供等のさめく聲も聞え來て靜かに告ぐる夕暮の鐘。
家々の戸は皆かたくこざされて田面靜かに春雨のふる。
しこくしこく降る五月雨に苗代の水かさふねて早苗ふるひつ。
父上さかすかによびてひざまづき墓しばし去りかねにけり。
服ぬぎて椽に出づれば吾弟らの蟬取聲のかしましく聞ゆ。
人々はいねにけらしも我がをれる蚊帳ぬちにたつ蚊やり線香
八月の眞晝靜けし花畑の草むしる手に汗おちゆくも。
月なくに星たゞ空にかゞやきてかなしみ事を思ひ出でつも。
いにし年親しみし書をひもこけば櫻の花の挿まれてあり。

秋

永田次雄

秋なれば思はぬ事の思はれて獨り長夜をすごすこあり。
小雀の軒端に遊ぶ朝なり花賣る子らの聲の聞ゆる。
なんこなくこぼろぎの音の聞きたくて今宵もこの堤越え
來ぬ。
たゞ一人歩む田徑は一つなり秋の夕陽に赤きみちなり。
おほぎかに昇る朝日にま向ひて秋の大地にしこを踏みけり。
さんさん門を叩くか秋風に沿ふてきこゆる犬の遠聲。
何一つ書くこなけれ秋の夜は故郷さほく思はゆるかも。
ほのほのさあけゆく空を農夫等の田にうち向ふころとなり
たり。

久々に友に逢ひて話すうちいつしか更けて月出でにけり。

侏儒の聲

山口久彌

赤々入り目を受けて黒猫と睨み合ひてし冬の日の我。
秋の陽のみなざる野邊を唯一人尾花隠れに人の歩める。
木の間漏る入日燃わたり冬枯の河原の果に一人佇む。
鬱々時れやらぬ胸を抱き來ぬ夕日照りのはゆ芹の堤に。
湖の高鳴の音の絶えまなく今日も聞えて今日も亦暮れぬ。
枯れ續く堤のをちの小林に今し夕日の落ちなんこする。
夕暗のたゞよひ來る芹川の堤遙けし秋の雨降る。
小夜中を誰かに遇へる心地して河風寒き堤にたゞづむ。
ひこしきり雨足つよく時雨して月は照りたり芹の堤に。
芹川の堤をあゆむ暗の夜は亡き魂出でゝさゝやく聴ゆ。
唯一人夜のにはひに憶れてさまよふ野邊に薄たはむる。
寂として音無し夜の芋の葉に青く冷たく月の照らせる。
月照る夜夜學の子等の聲聞けば過ぎし六年の我に歸りき。
冷たくも靜けき海にたゞよへる月こそ如何に平和なるらむ
なつかしや北海道よシベリヤよ雪の荒野よ牧場の緑よ。
荒野行く汽車に乗りたく思ふかな我やこのごろ荒野憶る。

暮鐘

疋田芳夫

家々の雨戸はかたく閉ざされてものすこく聞ゆ木枯の音。
花の王さほこりしこれの菊の花おそろへしるく冬の來向ふ
年経りし庭への池のたまり水紅葉ば一つかそけく散りぬ。
カラカラ鳴子の音に小雀の飛立つさまを見てゐたりけり
縁にていろざられたる庭木にも色すきそめて秋は來にけり

山吹に寄する一首 北村彌一郎

ちぎられし黄の山吹に心せよ人のはてしもかくぞあるなれ

八月抄

澤 效一

もうこしの歌其他

ほあかりの蜀黍畑にひろげれば雲に隠るる月ありこおもへ
夜のくだちゆばりに出づ蜀黍の畑の上なる星あかりかも
星の夜の黍の畑のくろきかけたゞにひそけく吾が見たるか
な。
鉾蔭の杉生のなかのおぐらきにそここに咲くおにゆりの
花。
よあらしの昨夜ありけりこの朝いゆく山路の赤土のいろ。
うら鉾の竹にそゝける小糠雨やゝに濃くなりて煙らひにけ
り。
竹の葉はひそまり垂れてふりそゝぐこまかき雨のたまる葉

のいろ。
晝近く雨のあがれば庭つちのしめりけざやかに松影うつす。
しづるるこいまでも闇きあかき松の松かさくろく松の間に
見ゆ。

百日紅・おとづれ

おとづれてくれき友居らぬ庭ぬちを去りがてに見し百日紅
の花
山住みの友を訪ひ來し吾ぞ石段をゆきつゝ友思ひをるも。
夕づく陽まうけにうけて友が家の百日紅は花咲きさかる。
葉鶏頭の午後の日ざしにもぬさかる垣根の徑をゆき過ぎに
けり。
うつし世をこゝにこもりて繪をかきたまふ師の仕事部屋の
ありがたきかも

木槿の花

朝なさな田を見にゆく咲きそふ木槿の花の土手の細徑。
ほのほの河原さ霧の明るな木槿の花はあらはれにけり。

なつめ

大雨のあがれる庭に垂れかゝる棗のうれのつぶらなる實よ。
つぶつぶに熱れし棗の木のはしづもりにつゝ雨霽すも。

隣家にこのごろいれし植木屋の鉄の音を土間に聞き居り。
いかづちの遠鳴るききてこもりの部屋を少しく歩みたり
けり。

いかづちのいよいよ近くなりければ土間の障子につたひ響
けり。
讀む本に眼をば任せて迎りゆく字には心のうつろなりつゝ。
眼閉づれば甦る痛みすべなれただに寂しくなれる我はや。
思はぬに友の來たりし旅先の便りは病の床に讀みたり。

(自横風苦吟以上二首)

白の餅ひ食はすすれば老ひらくの母のよろこびはひたぶ
るなるも。

馬鈴薯子がやけりけりおほははに食うべまつらすふる里の
家。

村祭情緒

うぶすなの山ふこころにこよめきて今朝はみてぐら奉るな
り。
かにかくにありのまゝなる心こもなりて氏神おろがみにけ
り。
妹らが叫ぶ囃子の小さけれ松の間の月にすみわたるなり。
若衆のうたふうたにはうち連れて踊る娘等たぬしきろかも。
星月夜一人しもぎる並木路に風はすこしくつのりけるかな。

朝低回集

旅の日の歌 (連作)

霧深き觀音山のきさはしの石に垂れたる眞水すがしも。
夕立のあまの雫の落ち止まぬ檜のした土しこさなるかも。
あさほらけさ霧立ちたる麓邊のひろ野の遠に日さす山見ゆ
あかき山の山の小霧のたちにつゝ今日か晴れなむ空もよひ
かも。

朝戸出のしだりの藪をぐぐりゆけばこの山寺の畑に出でた
り。

檜の木の新き木ぬれゆ霽くして朝すがしもこの宮居は。
朝戸出の觀音坂をのほりゆけば身ぬちに覺ゆほのかなるぬ
くみ。

そぞろ來て歩みよりたる松生の峰吹く風は明るかりけり。
おほきかに流るる雲のおのづから西にかた寄る風によろし
き。

夜をこめし暑さながらくろ雲の朝空を押しゆく力こもら
ふ。

下ごころ

(日記のはしに書きちらせる歌)

ひたすらになすすべ知らに下心涌くさびしさよふみを讀み
つゝ。

おのづから眠さ覺えて遠さかる夜汽車の響ききて居にけり

田園小見

幼なこき小鮒を捕りし思出のささの小川の虎杖の花。
合歡の木のならび葉めてゝゆく徑の山のなぞに誰がおく
つきぞ。

雨雲のひろがりしるき川原邊の茨の花はいろさびにけり。
すすくき穂先鋭き稻の葉にひそけくやする夕の白露。
すすくき青田に出でし稻の穂のこまかき花に夕風の見ゆ

水泡のはな

高祖 保

今日たまたま波のうねりを戀ふこしつゝわが磯濱に來りけ
るかも。

砂濱の砂にしあればもあり立たず波のうねりの曳きのしづけ
さ。

寄する波のゆたけくもあるか晝落ちて磯邊砂濱に人の音せ
ぬ。

磯波はこころ寄すれ見のかぎり琵琶湖島山陽のおちむこ
す。

ひむかしの磯つ山べの百いくりしぶきかへせり吹くうみ風
に。

吹く風になびくは汽船のけむりなりかゞよふ眞日に濃き湖
のいろ。

こゝにして入日にちかき陽かけ浴み琵琶湖島山つばらかに
見ゆ。
夕さりて風出でたらし濱邊にはざぶりざぶり波あけてる
る。

磯濱にわが来にければ龍膽の花むらさきは縫せてありけり。
砂濱に下りゆくひまのころゝ坂こゝだうすきは龍膽の花。
磯濱にわが来にければ琵琶の湖や夕霧さほく沖の島みゆ。
松籟のひこゝきこむ磯つ路に消なば消ぬべしあが足の跡。

芹川堤一首

この長手いまだ暮るゝに早からし曳きゆく馬の尻にあたる日

霜月抄

今日みればこの庭隅の山茶花は咲のかほそし雨に濡れつつ。
咲き更けて咲きのかほそになりてこし山茶花見つ冬ふか
みかも。

み冬づく寒けき庭にあなあはれ咲きほそりたる山茶花の花。

一月集

石手洗に水音さむし朝まだき誰やらむ水を使ひてゐるも。
あさまだき厨に米を研ぎすてゝ火の氣暗しこうちすかしる
る。

おのれしらす水こ流せし流れ米いつわりて事を流せり我は。

寥しさを寥しむこもまれらなり歳らしき歳にわれなりに
ける。

おのづから起るうれひは儚なごきなくもわがうれへる
たりし。



俳句

櫻

永田次雄

馬に乗つて櫻の方へ消えにけり
ほろほろこ櫻散るなり坂の上
美しい腰の刀や山櫻
長袖のねぼしさをめて櫻かな
ほろ酔で見る人のあり宵櫻
行燈に又ほろほろこ櫻哉
狸ないて朧月夜に櫻ちる
櫻見て酔ふて流れて花見船
ふいこ見て立ち止つて見て櫻かな
弓をはる腕に骨あり八重櫻
泣く子をば櫻々こ子守哉
御経讀む聲伸々こ櫻かな

米一粒にまつはる生きの尊こさよわれは端なくも米を流せ
り。

寒冷は極まるらむか小夜の門のつらゝ曲れり風吹きしまま
夕さりて冷えまさるらし鉢植の花木萎れたりみつゝ哀れさ
いのねぶり日頃足らひて心よし心よきまま寝すごすわれは

一人の母

小夜たけておのれひこりが用足すこそるに足をしのびま
かれる。

足音をぬすみて用を足しにゆくその足音を母に聞かれたり
はゝそはのははを起して甲斐もなし用たしてゆくこのしの
ひ足。

尊さきろ父は吾になしはゝそはのはゝのみを守りて世をし
渡らな。

たらちねを古りたるままに持つひこを羨しむ父なきわれ
は。

はゝそはの母の子なるか母のみののはゝの子なるか父なしわ
れに。

年老ひて五十路すぐるこ己にひさしはゝそはの母は年老ひ
にけり。

はゝそはの老ひは年ふる年ごきに人目かも見えてまさりこ
そすれ。

稀まれに小言聞かすこはゝそはの母がのたまふここのよる
しさ。

独なく宵に影あり八重櫻

琴の音につれて散り行くあの櫻

櫻咲いて今は今年の春なるぞ

櫻散る台場見て行く旅人あり

尺八の音の消ゆんあなたは櫻花

無題集

西澤新藏

新學期 光るボタンご得意顔

夏休みすんで宿題ごりかゝる

夏休み 朝寝に晝寝 宵寝かな

敷居から足の出てゐる晝寝かな

聲ばかり歸省の耳に雲雀かな

電燈の光も暑し蚊帳の中

風暑し裾のもつれる野道かな

一列に並んで歩く雪の路

こびの背を見る城山や風寒し

初雪や振り反り見る靴の跡

軒水の屋根打つ音や糸の雨

母今宵ゐまさで知りぬ雨の音

雑吟

大森元太郎

下車すれば我が里見て柿赤し
 殘照の靜かに柿の小村かな
 風や破れ障子に吹荒るゝ
 涼風に鳥隠れ行く白帆かな

春雜吟

須山清太郎

野も人も笑ふ祭や村の春
 花蔭につきぬ興趣や熊野舞
 ひら／＼と酔へる姿や散る櫻
 花散りて覺ますもの無き今朝の窓
 羽衣を舞うて花見の興つきず
 行く水に影をうつして櫻かな
 花散るを惜しむ涙か 春の雨
 若葉埋る城山煙る 春の雨
 校庭や目覺むる春の若葉かな

桐一葉

正田芳夫

水仙の芽ふき出でゝ寒に入る
 てつびんの音靜かなる夜更けかな
 親子黙々として 稻刈れり

雪雲のかゝれる山の社哉
 吹雪して 寒念佛の聲高し
 病室は湯氣立登るさむさ哉
 窓あけて見る星影や雪あかり
 雪音のする夜は汽車の笛さびし
 新造の舟の匂や 水仙花
 春の雪を吸ひ込む河の流れ哉
 五位さぎの糞の白さや 朝寒き
 野梅活けて 靜かな朝や 紀元節
 病床の梅にさす月 朧かな
 アネモネの小さき花よ 春日影
 鳥霞む花火ひついて日の暮れし
 古城趾は青葉若葉や れんげ咲く
 いちご取れば我が手の赤くそみにけり
 川筋は夏の灯赤し 舟涼み
 夕顔や蜘蛛にせわしく暮にけり
 ぶらんこに笑つて見せる子供かな
 夏帽の友訪ひ来る 休暇哉
 湖近き 踊の聲や 落つる月
 寺の屋根の 彼方夕立 雲早し
 案山子にも月靜かなり 湖の音
 笛吹けば 月上るなり 松の影

口さむ聲におそろく寒夜哉
 一葉の桐の葉おちて後しづか

山風抄

居長英三郎

朝空や日に眞向ひて 一つ鳥
 うすら日や蟬鳴きさかる山の朝
 朝鳴く蟬一しきり 岩による
 眞晝なく蟬しきり谷に栗あり
 伸びのびるへちまの蔓や 青み空
 一葉一葉に空青み 深み眞夏也
 崖はなや 眞晝陽白し 雲入道
 雲や雲明るき峰に湧きにけり
 遠鳴るやはや 玉水の夕ほがら
 夕立や皆ぬれそめし木の葉哉
 へちまのびて 夕日紅くも 空映ゆる
 岩蔭に這ひ込む 闇や虫ひそむ
 村々に 飯煙つゞき 夕迫る
 夕吹くやあちらこちらの 鐘の聲
 風呂を出でゝ 夕焼赤き大樹かな

雪雲

豊田孝三

信號燈 稻田を登る 月清し
 月出でゝ 賑はゝしきや 歌の聲
 高原に 月見る 宵や 秋の風
 日の入りて 我が家は 遠し 秋の風

夜寒朝寒

高祖保

奥の細道夜寒の宿を重れつゝ、
 朝寒の我を疑ふ鳥かな 琥珀洞
 水霜や 茶の花白し 庭を掃く
 一鳥の飛んで 伽藍の入日かな
 寒冷の乞食をみてゐたりけり
 月代や 冬田乾いてあるところ
 鐘樓や 冬明けそめて 松の音
 残月に 踏めば 石鳴る 糸すゝき
 難産や 夜寒の道の 石の聲
 月明に 石蹴りかへる人なりし
 白菊の中の 一つが 伸び更けし
 夜學戻りが 犬を 吠わさせてゐたりけり
 白菊濡れて 雨後の 月澄む 夜寒哉
 秋の女また 行きかへる 寒さかな

鐘の丸の空井戸へゆく 芒かな
月明蕭々川の在り處やすき原
朝寒や薄日ほのかに風邪を病む
心むなし薄日のなかをかへりくる
朝寒を石蹴りかへる人なりし
朝寒は只秋風や桐一葉
落葉焚くや庭朝寒に掃きよせて
大道無門夜學は落ちて肌さむき
石叩き消れて時雨るゝ寒さかな
こつぶりこ暮れて尙知る秋づかれ
夕寂の門に人なき 夜寒かな
仕舞風呂に柿の落葉を聞いてゐる
思ひ久しく枯野をめぐる日登かな
枯野めぐる日登けながき思ひかな
石たゞき居るや時雨るゝ磧かな
山の尾のふこ亦消えし日南かな
末枯や因屋めぐれば旅ごゝる

冬

木

澤

效一

冬晴れあらはな顔で居る
冬晴れけぶる土間である

冬晴れ枇杷の木の花
子等の聲風よけてゐる
山の日だまり穂芒ばかり
子供いつてしまつた乞食が出て來た
杉木立暮るるに早き冬山
子供いつてしまつた山の日だまり
がつがつ鶏が食つてゐる木箱の米
鶏出されて日暮れる
かぢかんだ指湯に解けゆく
御經あがつてゐる冬晴れの家
み佛あかるい障子に日射し
漬物石をうごかして日暮れてる
水汲みたして手洗鉢
木枯の窓しめきつて明るい部屋なる
草枯れうまし飯盒をひらく
新藁背囊の並べられて在り
ひこりもの思ひものを言ひ居り明るい空
冬木に霜が新しい朝
猫柳芽ふいた袂にふれて
猫柳川原に風はさむく
川原石ころの冬
友の肌が白い蒲團の中の友

病んで瘡せもせず 白い肌
病んで冷たい眼

雨冬木立が濡れひかる

蔓雨にぬれきつた

月夜風にふかれて歸る

いんぎんに頭をさける人を立つて見てる

禮かはす道のぬかるみ

かさこそ明るい林の中のけはい

ゲートルに朝の日光さし

逝くものは影なし冬木の風

こつぶり暮れて歸つて來る

月

叢

漢見覺了

叢にたしか聲あり 秋の月
猿の聲物凄し秋の月更けて
なほつかな柳もやせし夜寒なる
欄干の夜露つめたし秋の月

花

路

大橋

啓

村祭りや太鼓に子供起されし
夏草の弱りや露のこもる夜

あれ見よこ明り消しけり露路の月
出て見れば露路一面の月明り
散る雲の秋あのためり城の鐘

比叡行

宮川卯衛門

もみぢ月の一日洛北比叡に遊ぶ
厄日過ぎ 稻穂實れり 東雲の朝
天曇る 比叡の山のもみぢ月
琵琶湖霞みて沖に飛ぶ禽一羽
宿院に憩ひて百舌鳥の聲を聞く
西塔の森を流るゝ小川哉
大原女の言葉美し八瀬の里
薄暮京洛の地を去る
日は暮れて 都大路の涼み哉
鴨川の水は澄みたり京の夕
稻荷山通りて暗し 秋の暮

庭下駄

澤田勇二良

庭下駄は履き古したる 蛙哉
雨にぬれし小犬よろめく裏長屋
なる鐘を五つかぞへていそぎけり
名月や猫も月見てゐたりけり

紀

行



關東旅行記

西村榮次郎

第一日（五月十一日、十二日）

大正十五年五月十一日夜、校長先生、諸先生方の御見送りを受けて僕等八十のクラスメーツは五月雨をほふる我が彦根を後に、一路關東への楽しい旅に上った。

車中十時間、恐らく此の時ほさ友の面に心安ささ長閑ささが漲つて居るのを見たことが無かつたらう。湧き返る歡聲、渦巻くさよめき、前途は永い、懷は暖かい、とても愉快だ。汽車よ永久に走れ、外は五月闇であらうさ、冷い小雨が降つてゐやうさ。その中に十二時となり一時となり、通り越す驛々もガランとして人影も見ぬ様になるさ、はしやぎ疲れてか、一人二人と寝仕度にかゝつて、折々寝入られぬまゝに微

かに眼を開いて「ホッ」息を吐き囁きが靜寂を破つて取交はされる。沼津で腹をこしらへて……もう富士の裾野あたりだらうが、時午前四時前、それさ氣がついて見るさ、行手に柵引く一抹の曉雲は刻一刻展び擴つて、右に目指す箱根の山嶺を擁し、忽然として大芙蓉峯は車窓の左に勇姿を横たへた「富士見ゆ」の叫びは車内の隨所に起つた。之に元氣づいて假睡を續け來つた連中は一樣に飛起きる。

見よ！幽冥の空に輝く白銀の靈峯！大裾野は曉闇に包まれて未だ覺めやらざるに、獨り富士は黒暗澹たる塊雲を背景として、玲瓏の肌を曝し一大壯嚴の姿を以て僕等を迎へてくれるでは無いか！曉色漸次に散じて大裾野は我が前に展開されて行く。快哉！十里凡て之緑、柔い新緑の香は車窓を壓し、丘陵の起伏森林の點綴、民家の散在或は遠く或は近く或は高く或は低く、其の配置の妙を極め、延々模綯として極まる處

を知らず、此の雄景に接して宏大調達の快感に浸るのみ。

下り行く相模平野の嫩葉は前夜の露に朝日を受けて、清新の氣充ち滿つ。國府津にて熱海線にのり換へ小田原下車、登山電車平垣線にて湯本に向ふ。小田原の街は綺麗真紅に塗られた大型の乗合自動車、立派なハイヤーは廣い街路を箱根へ疾驅し、通りには大都會的の美しい店舗軒を並べ、何れもニスの香、ベンキの香を漂はしてゐる。湯本にて登山電車に乗換へ、此のあたりに早川の流れが迂曲してゐるもの、激湍岩を嘯むの豫想は見事裏切らる。小さな小石河原に過ぎぬ。随分待たされた揚句、文字通り鮎詰めにされてじり／＼と絶壁に沿ひ、懸崖に臨み峽谷に架かる鐵橋山腹を穿つ隧道を経るこゝ幾度、湯本、宮の本、底倉と何れも足もきに沈んで行つて終點強羅に着く。

強羅遊園地で小憩、遊園地は今櫻葉に埋もれて、葉陰に見ゆる「千人風呂……」の案内札も旅の身に珍らしくも懐しい。ケーブル代を節約して遊園地の奥を踏み分けて、上強羅に登り、それより雜草生ひ茂れる山の肌を縫ふて大湧谷へさ目指す。見下せば宮の下、底倉の方は青葉の覆ふところ、遙か彼方には箱根の山群連脈をなし、富士を見るに名高き長尾峠、乙女峠も此の方向、仙石ヶ原、直ちに右に路取るべしと足下より流るゝ傾斜は遠く伸びて草茫々、滿目豁然高原的氣分は此處に立ち始めて味は、る。大湧谷近し。硫化水素の

異臭に堪へず、初夏の強き陽光は灰白色の斷崖に映れて、もく／＼噴出する水蒸氣は朗かな中空に消え去り、あたり一帯は格別に明るい。熱湯の沸くほざり、惡臭もものは先づ國府津仕込の驛辨を開く。既に、現箱根遊船重役藤枝先輩某氏の好意による案内人は待受けて、姥子温泉を経て湖尻に出づ。

湖尻への途、杉並木の間に隱見する芦の湖の全景も捨て難いものがある。同じく好意による自動艇便乗、水路三裡、紺碧の湖面を掠めて元箱根に上陸、時間を急ぐのあまり、權現様へも參拜せず、近道を取つて急ぎに急ぐ。塔ヶ島の離宮を途々拜するに、震災當時の御外屏の崩壊は今なほ修理を加へられず、恐れ多き極み。關所跡、たゞ礎のみ残りて徒に松籟の物悲しきを聞くのみ。芦の湯のほざり「某々中學御宿」に記せる清楚なる洋館あり、竊に羨望して止まず、箱根の一夜必ずや一興あらんさ。小湧谷より電車にて下山せんこの豫定も、驛員の無責任なる應對にて一向に埒あかず、一先づ宮の下に下り、監督の先生達の熱心なる交渉の結果自動車屋側も亦僕等に同情して、犠牲的に破格の賃銀を以て應じて呉れることになった。そこで二臺の乗合、二臺のハイヤーに分乗相次いで小田原へさ全速力、何しろ三十分内外にて小田原に着かなくては、列車の間に合はないのだ。急勾配、急カーブの連續、一度操縦を誤れば斷崖の下へトンボ返り、警笛ミブレ